

明治大学平和教育登戸研究所資料館主催  
「国際博物館の日」・企画展「帝銀事件と登戸研究所」関連イベント 講演会  
「登戸研究所所員が語った帝銀事件とその検証」

2019年5月4日（土・祝）13:30～15:30 於：明治大学生田キャンパス第一校舎2号館200教室

### 講師紹介

**渡辺賢二** 1987年より、川崎市民と教諭を務めていた法政大学第二中・高等学校（中原区）の高校生たちとともに、登戸研究所の調査を行う。その活動の中で収集された登戸研究所資料は、当館の主要コレクションの一つとなっている。現在当館展示専門部会委員。主要著書『陸軍登戸研究所と謀略戦 一科学者たちの戦争』（吉川弘文館、2012年）。

**山田 朗** 当館長，明治大学文学部教授。専門は日本近現代の国家戦略史・軍事史・天皇制・植民地支配・戦争責任の諸問題，歴史認識，歴史教育論。主要著書『昭和天皇の戦争―「昭和天皇実録」に残されたこと・消されたこと』（2017年，岩波書店），『兵士たちの戦場―体験と記憶の歴史化』（2015年，岩波書店）

### 1. 市民・高校生と掘り起こした登戸研究所（1987～91年）

#### 1) 川崎市中原平和学級

- ①川崎市教育委員会主催の行事
- ②市民・高校生が企画委員として参加

#### 2) 登戸研究所を探る（1987～88年）

- ①ある新聞記者が「戦争中，稲が実らなかった」と話したのが調査のきっかけ
- ②市民・高校生による現地調査
- ③登戸研究所に関する資料はどこにもなく，語る人もいなかった
- ④現地調査を繰り返す中で，偶然勤務していた人に会った
- ⑤時期を同じくして，「青春を取り戻そう」と元所員らの中で登研会をつくる動き
- ⑥元勤務者より『雑書綴』が提供される
- ⑦『雑書綴』より登戸研究所第二科の活動内容がわかり，中心的な研究者は伴繁雄だとわかった
- ⑧伴に電話してみると「何も話すことはない」とけんもほろろだった

#### 3)1987年7月，川崎市中原平和学級編『私の街から戦争が見えた』（教育史料出版会）の出版

- ①川崎市中原平和学級による本が出版
- ②マスコミでも話題になった
- ③本を何も話してくれなかった伴繁雄（登戸研究所第二科，毒物研究の責任者）にも届ける
- ④伴から「よくまとめた」と評価された

4)平沢武彦が「甲斐捜査手記」第5巻を提供（1989年）

- ①1987年5月、帝銀事件で犯人とされ、死刑が確定した平沢貞通が、30年以上にわたる再審請求もかなわず、拘置所で死去
- ②平沢貞通死後、養子の武彦が再審請求を引き継ぐ
- ③再審弁護団に、帝銀事件捜査主任刑事が残したメモ「甲斐捜査手記」が提供された
- ④第5巻に、警察の捜査に応じた伴の証言が記録
- ⑤登戸研究所が独自に開発した「青酸ニトリール」が帝銀事件に使われたのではないかと証言。  
また、毒物兵器開発中に南京・上海で人体実験をおこなったことも証言。

5)川崎と長野の高校生による元所員らへの聞き取り（1989～91年）

- ①長野県赤穂高校平和ゼミナールの生徒による、元所員らへの聞き取り
- ②「大人には話さないが、君たち高校生には話そう」と伝えてくれた
- ③伴・北澤隆次（青酸ニトリール在庫管理責任者）からの聞き取りや資料提供を受ける
- ④伴は帝銀事件について語ることはなかったが、北澤は帝銀事件についても証言
- ⑤1991年、長野・赤穂高校平和ゼミナール、神奈川・法政二高平和研究会『高校生が追う陸軍登戸研究所』（教育史料出版会）出版  
→映画「帝銀事件 死刑囚」の熊井啓監督より「すいせんの言葉」を寄せられる

6)「登戸研究所跡碑」を生田神社境内（生田キャンパス内）に建立（1988年10月付、実際は翌年）

- ①登戸研究所に勤めた人たちが集い、弥心神社跡地（生田神社）に碑を立てる動き
- ②碑に刻まれている句「過ぎし日は この丘に立ち 巡り会う」が示す彼らの気持ち
- ③この碑を建立するための明治大学との交渉は、伴が行った

## 2. 伴繁雄の晩年と帝銀事件（1990～93年）

1)登研会で語られた話（1990年代）

- ①毎年、登研会が開催された
- ②そこでは、登戸研究所時代の様子が主に話し合われた
- ③戦後については、ほとんど語られることはなく、GHQの訊問や米軍への協力の話は出なかった
- ④帝銀事件についても話されることはなく、北澤が青酸ニトリールの戦後の配布状況を話した程度

2)伴が仲間から原稿を集める（1990～93年）

- ①第一科・第三科については他の人に原稿を頼み、第二科は伴が執筆  
→中国での人体実験を伴は謝罪する

3)本としての出版準備（1992～93年）

- ①生原稿 800 枚余
- ②出版予定の会社を選び、ワープロ化
- ③しかし、出版が決まらないうちに1993年、伴死去

④原稿には跋文執筆者として「有末精三」の名がある

4)2001年、『陸軍登戸研究所の真実』（芙蓉書房出版）出版

①伴死後、妻より原稿の提供を渡辺は受ける

②原稿を見ると、帝銀事件関係および元登研所員の米軍への協力経緯に矛盾があった

→生原稿には1948年にG-2（GHQ参謀第二部）に召喚され、「ギブアンドテイク」が持ちかけられたとある

→ワープロ原稿には時期について詳細な記述なし

帝銀事件が発生した1948年の出来事については、極めて注意深く検討されたと考えられる

5)今回の企画展で改めて「甲斐捜査手記」を分析し、判明したこと（2019年）

①有末精三が陸軍の毒物研究を捜査しないよう、圧力をかけた事実

②伴の帝銀事件犯行毒物に関する検証が二転三転する背景

③特に平沢逮捕直後、「技術的再検討」がなされた背景

④しかも、科学者らしからぬ、実験もせずに犯行毒物を検証した背景

### 3. 有末精三

1)戦前の有末精三

①1942年～終戦まで参謀本部第二部長

→陸軍の秘密戦のトップだった

2)戦後の有末精三

①1945年8月～1946年3月 対連合軍陸軍連絡委員長

1945年12月～1946年3月 復員事務官

1946年7月～1956年12月 駐留米軍顧問

→G-2長のウィロビーの下、「有末機関」を組織

②1970年4月～1977年3月 日本郷友連盟会長

→戦後も旧日本軍人に影響を及ぼし続けた

③1992年2月 死去